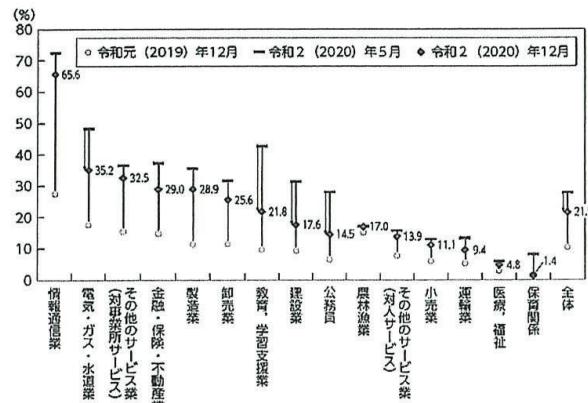


別紙解答用紙に解答すること。「小論文(論文Ⅰ)」「小論文(論文Ⅱ)」とも必答

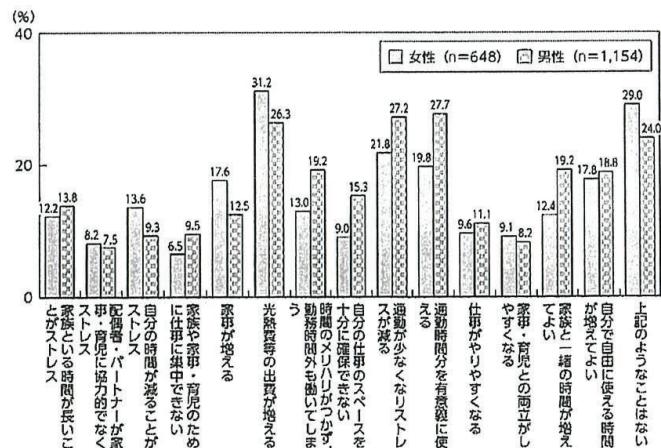
以下の図表(1)～(4)は令和3年版男女共同参画白書に掲載されている、新型コロナウイルス禍の影響に関連した変化についてのデータです。これらをもとに以下の問いに答えなさい。なお、テレワークとは、情報通信技術を活用した、時間や場所にとらわれない柔軟な働き方のことです。

(1) 業種別テレワーク実施率の推移(就業者)



(備考) 1. 内閣府「第2回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」より引用・作成。
2. 令和2(2020)年12月24日公表。

(2) テレワークを経験して感じたこと(テレワークを経験した就業者)

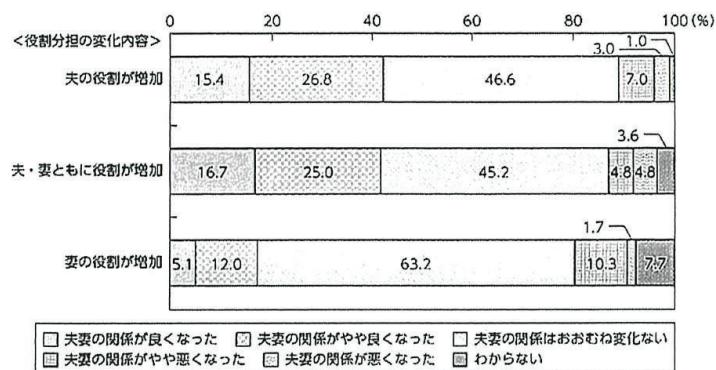


(備考) 1. 「令和2年度 男女共同参画の視点からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響等に関する調査報告書」(令和2年度内閣府委託調査)より作成。

2. テレワークに関する設問「就業者」定義…「正規の会社員・販賣・從業員」「パート・アルバイト」「労働派遣事業所の派遣社員」「嘱託」「その他形で雇用されている」「会社などの役員」と回答した人が対象。

3. 「第1回緊急事態宣言」にテレワークを実施した人が対象。

(3) 家庭内の家事・育児分担の変化と夫婦関係の変化



(備考) 1. 内閣府「第2回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」より引用・作成。
2. 令和2(2020)年12月24日公表。

(4) 令和2(2020)年12月時点の家事頻度



<比較：令和元(2019)年度調査>



□ ほぼ毎日・毎回する □ 週3～4回程度する □ 週1～2回程度する □ 月1～2回程度する
□ まったくしない

(備考) 1. 「令和2年度 男女共同参画の視点からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響等に関する調査報告書」(令和2年度内閣府委託調査)より作成。

2. アンケートの対象者は配偶者のいる男女。回答者自身とその配偶者に回答を求めた。

別紙解答用紙に解答すること。「小論文(論文Ⅰ)」「小論文(論文Ⅱ)」とも必答

設問

問1 図表(1)「業種別テレワーク実施率の推移(就業者)」を読み取り、テレワーク実施率の低い業種の特徴について分析し、文章で説明しなさい。

問2 図表(1)「業種別テレワーク実施率の推移(就業者)」を読み取り、第1回緊急事態宣言時(2020年5月)と比べ、その後にテレワーク実施率が低下した業種の特徴について分析し、文章で説明しなさい。

問3 図表(2)「テレワークを経験して感じたこと(テレワークを経験した就業者)」を読み取り、男性就業者と女性就業者で「感じたこと」の内容にどのような違いがあるかについて考察し、文章で説明しなさい。

問4 図表(3)「家庭内の家事・育児分担の変化と夫婦関係の変化」を読み取り、新型コロナウイルス感染症流行下において夫婦関係が改善した家庭の特徴とは何かについて、文章で説明しなさい。

問5 図表(1)～(4)全体をふまえたうえで、新型コロナウイルスの流行終息後における働き方および家事分担のあり方の見通しについて、あなたの考えを述べなさい。

以 上

別紙解答用紙に解答すること。「小論文(論文Ⅰ)」・「小論文(論文Ⅱ)」とも必答

次の文章を読んで、問1から問3に解答しなさい。

日本では、多くの場合、障害のある子どもたちは多くが養護学校に通い、卒業してからも作業所などで生活するため、日常で彼らと交流する機会はほとんどありません。(中略) 車椅子に乗った障害者がその大変さや努力を学校で講演するという経験以上のことを、私たちの多くは知りません。だとすれば、知らないものは、教科書や本、テレビやネット等のメディアによって知ることがほとんどですから、私たちが抱く認識はどうしてもその伝えられ方に影響されがちです。そもそも考えてみれば、テレビのなかに障害者が出てくることはきわめて稀です。世界保健機構(WHO)の発表によれば、全人口の15%に、精神障害や発達障害を含む何らかの障害があるとのことです。全米俳優組合(Screen Actors Guild of America, 2005)の調査によれば、テレビの中から人物の中で、視覚障害や聴覚障害を含め、障害が確認できるのはたった2%、しかもセリフや言葉を発する人物となると全体の0.5%。テレビのなかでも彼らは「見えない」存在です。日本でも、状況は大して変わらないのではないかと思われます。24時間テレビの初代プロデューサーが障害を持つひとを「見えないところに追いやっている」とした表現は、今もあながち的外れではないといえるでしょうし、逆に言えば、私たちと同じ社会に暮らす障害者の存在を可視化するという意味で、チャリティ番組は私たちの認識に彼らの存在を知らせる点において意義があるといえるのではないでしょうか。

しかし今、その描かれ方は見直しを迫られているようです。そもそも、障害者はメディアのなかでどのように描かれてきたのでしょうか。そこにはステレオタイプも存在します。ネルソンは、障害者に対して、1) (チャリティ番組に描かれているような) 弱者や犠牲者、2) (パラリンピック等に代表される) 天才的/ヒーロー、3) (障害者によって引き起こされる事件や事故に基づく) 暴力的な脅威、困難、4) 障害のために状況を変えづらく依存的、5) ケアされる運命にあり、お荷物になる、6) 幸せな生涯が送れないというステレオタイプ的な描かれ方が繰り返されてきたと指摘しています(Nelson, 2003:175-180)。また、カナダのニュースにおける内容分析では、彼らを描き出すときに、「状況に苦しんでいる」「障害を克服する」「車椅子に縛り付けられている」という用語を用いることで、彼／女らを犠牲者として描いたり(victimize)、医療の問題として描き出したり(medicalize)する傾向があると指摘されており、そのストーリーもすばらしい業績に注目したり、ヒーロー化して描かれたりする場合が多いと報告されています(CAB, 2005)。

日本でも、社会学者の好井裕明氏が、メディアにおける障害者表象はあくまでもステレオタイプ化されたものに過ぎないとし、その表象/イメージを、1) 同情、憐憫の対象としての描き方、2) 困難を克服した超越する存在の象徴、そしてその中間に、3) 福祉サービスを必要とする困難を抱えた一般的な障害者という3つのタイプがあることを指摘しています(好井, 2011:152-153)。

今から100年前、まだラジオもテレビもなかった時代、ジャーナリストであり批評家であったアメリカのウォルター・リップマンは、私たちの環境(社会)に対する認識は、メディ

アによって作られるのであり、私たちはそうして作られた環境のイメージを基準にして行動していると述べました。そして膨大な情報をわかりやすく理解するうえで、ステレオタイプにも一定の機能があるのだと述べています（リップマン、1922）。メディア制作者も、障害者のすべてを知っているだけでなく、紙面や時間の制限があるなかですべてを表現することはできず、そのなかで読者や視聴者にインパクトのある内容にしようとすると、どうしても現実とはかけ離れたステレオタイプを増強させてしまいがちです。そして、こうしたステレオタイプに沿う形で登場人物を決めていく。つまり、登場人物は究極的には憐憫の対象やヒーローといった「記号」に過ぎなくなっています。こうした状況は、個人としてその人を認めるのとはほど遠くなりがちで、こちらが見たいように見るポルノと変わらないとステラ・ヤングは看破したのでしょうか。障害者といつても千差万別で、それぞれ個性を持っている上にたまたま障害があったというわけですから、ステレオタイプに沿わない人がいるのもごくごくあたりまえのはずです。

小川明子(2018) 「チャリティか、感動ポルノか？ 身体障害とメディア表現について考える」『インクルーシブ・メディア』<https://inclusive-media.net/note-01/2.html> から抜粋。

問1 筆者はどのような根拠から、障害者を「テレビのなかでも彼らは見えない存在」（下線部）と表現しているか。筆者が依拠した資料や調査名と、調査結果を記せ。

問2 従来のメディアにおける障害者表象にはどのようなものがあると説明されているか。文中に記載されているすべてを抜き出せ。

問3 この文章を踏まえて、メディアにおける障害者はどのように描かれることが望ましいと考えるか。具体例と共に説明せよ。

以上

両面印刷